

なんということであろう。やはり、この年齢になっても本当のことはコワイことである。今日もお世辞を言って日々をすごすことを改めて覚悟したのである。人生とは、ナント恐ろしいことであろうか。そして、それは決して実現してはならないことである。その果てしない波頭が、幾世紀にわたって波打っている。思えば河の石は何処かでコケが付き汚いそうです。やはり塩辛い海の波に洗われた石が美しいと言った人がある。なんで、ここで石の話であるのか。またしても、いま手に負えない「こと」に出逢おうとしているのである。この2月20日から意識されたものが本体を現わしはじめたのである。改めて、その本体なるもの、いったい何であるのだろうか。ここまでくれば、もう知る必要もないのである。何故か、それがすでに芸術をこえて人生を、それは言うてならないのであろう。また必要ないことである。さて、我々は、そして、私とは何であったか。もう一度問う、九州派の意味を！。ここにハイデッカーを持ち出すことは失礼であろうか。第二次大戦の前夜、すべてを含めて、意味は、そして無意味はハイデッカーの名を冠せられたらしい。その痕跡は現在の構造主義の輝やかなしい諸先生たちの行跡の限に、影となって時々、アブリ出されてくる。アブリ出されてくるやいまいましく、そのたびに名前はいねいに消されてゆく。そのハイデッカーが、詩人を論じたところで、初心にもどってゆくってなことを言っている。そして、私も、やがて、また初心に、九州派のはじまりに帰ってゆくのであろうか。それにてしては、初心があまりにも多いのである。私は勿論、初心ではない。逢った人々が初めてであったという簡単なことである。アメリカ、その名とともに出てくるのはリサであり浦田であり井上国夫先生であり、中西、ジョン・ランプリであり、わが友人オチオサム先生である。そして後期アメリカ、いわゆるコンニャクコミュンともなれば泉孝佳、刀根、柳、皆島の諸先生との出逢いの、葉のコミュンの神話が拡大してくるのである。それに岡田という芸術とも絵画ともなんのかかわりもない立派な諸先生方がいた。そして写真の関口、コンノ先生等々、アルフレッド、浅井先生等々、語ることのみ多くて、そしてこの段階になっても、確実に本になる保証はないのである。その保証がなければ書いても書かなくても同じようなものだ。この本が確実に出版されるとすれば、まだまだ確実に名を連らねられねばならぬ先生が大勢いる。例えば若いといっても30歳になろうとしている荘司義行先生などを、でも、この本の出版をいまだに信じる事が出来ない。出版されたとしても無残に変更されているだろう。その変更、また望むところである。日々、それは生きてゆくツタのようなものであり、例絵。この出版がこと志と違っていてもわたしは驚きもしないが、無念さもない。この本との出会いが、まさに”ムイ”であってみれば、いまさらすべては宇宙のことであり、10億光年の中に59歳という、年齢は所詮消え去るのであってみれば3,000ページという膨大な本が例え、2.3頁となろうと、そのまま出版されなくとも、いままで出版のために費やしたヨロコビを嘯みしめる術は心得えているつもりである。しかし、いまのいま、この本の出版されるものと信じて、ほかのことは考えていない。で、こんな不思議なフクロ小路は、やはり私の体質であろうかと反省ともつかない奇妙な世界におちいるのである。1987年9月8日、この文章

は大阪の上本町、ABC ギャラリーという画廊で書いているのである。やはり出版を前提として原稿を依頼した友人には出版できないとなればどんなアヤマリ方をしたらいいのか、現在のところ方法はないのである。